

身体的拘束適正化指針

I. 身体的拘束等の適正化に関する基本的な考え方

1. 理念 身体的拘束の原則禁止

身体的拘束は利用者の生活の自由を制限することで重大な影響を与える可能性があります。

壱岐市社会福祉協議会は、利用者の尊厳に基づき、安心、安全が確保されるように基本的な仕組みを作り、施設を運営し、身体的、精神的に影響を招く恐れのある身体的拘束は、3つの要件又は緊急やむを得ない場合を除き原則として実施しません。

2. 3つの要件の確認

(1) 3つの要件

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 切迫性…利用者本人またはほかの利用者の生命または身体が危険にさらされる可能性が著しく高いこと② 非代替性…身体的拘束を行う以外に代替する介護方法がないこと③ 一時性…身体的拘束が一時的なものであること |
|--|

(2) 要件合致確認

利用者の状況を踏まえ身体的拘束適正化委員会が必要性を判断した場合、限定した範囲で身体的拘束を実施することとしますが、拘束の実施後も日々の状況等を参考にして同委員会で適正に再検討し解除へ向けて取り組みます

(3) 記録等

緊急やむを得ず身体的拘束を行わざるを得ない場合、次の項目について具体的にご利用者、家族等へ説明し書面で確認を得ます

- ・拘束が必要となる理由（個別の状況）
- ・拘束の方法（場所、行為、部位、内容）
- ・拘束の時間帯及び時間
- ・特記すべき心身の状況
- ・拘束開始及び解除の予定（特に解除の予定が必要）

3. 身体的拘束に該当する具体的な行為（身体拘束に関するチェック表1、2）

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 徘徊しないように、車いす、いす、ベッドに体幹や四肢を紐等で縛る② 転落しないように、ベッドに体幹や四肢を紐等で縛る③ 自分で降りられないように、ベッドを柵（サイドレール）で囲む④ 点滴、経管栄養等のチューブを抜かないように、四肢を紐等で縛る⑤ 点滴、経管栄養等のチューブを抜かないように、または皮膚をかきむしらないように手指の機能を制限するミトン型の手袋等をつける⑥ 車いすや椅子からずり落ちたり、立ち上がったりにしないように、Y字型抑制帯や腰ベルト車いすテーブルをつける⑦ 立ち上がる能力のある人の立ち上がりを妨げるような椅子を使用する⑧ 脱衣やおむつ外しを制限するために介護衣（つなぎ服）を着せる⑨ 他人への迷惑行為を防ぐためにベッドなどに体幹や四肢等を紐等で縛る⑩ 行動を落ち着かせるために、向精神薬を過剰に服用させる。⑪ 自分の意思で開くことのできない居室等に隔離する |
|--|

4. 目指すべき目標

3つの要件すべてに該当すると委員会に置いて判断された場合には、本人、家族への説明を経て拘束を実施する場合がありますが、その場合も利用者の状況や介護の見直し等により、拘束の解除に向けて取り組みます

(1) 方針

次の仕組みを通して身体拘束の必要性を除くように努めます

① 利用者の理解と基本的なケアの向上により身体的拘束を除きます

利用者の特徴を日々の状況から十分に理解し、身体的拘束を誘発するリスクを検討し、そのリスクを除くために対策を実施します

② 責任ある立場の職員が率先して法人全体の資質向上に努めます

管理者、リーダー等が率先して研修に参加するなど、法人全体の知識、技能の水準が向上する仕組みを作ります。特に認知症及び認知症による行動心理症状について法人全体で習熟に努めます

③ 身体的拘束適正化のため利用者、家族と話し合います

家族、利用者にとってより居心地のいい環境、ケアについて話し合い、身体的拘束を希望されても、そのまま受け入れるのではなく対応を一緒に考えます

II. 身体的拘束適正化委員会の設置及び開催

次の取り組みを継続的に実施し、身体的拘束適正化のため体制を維持、強化します。

(1) 身体的拘束適正化委員会の設置及び開催

身体的拘束適正化委員会を設置し、本法人で身体的拘束適正化を目指すための取り組み等の確認、改善を検討します。過去に身体的拘束を実施していた利用者に係る状況の確認を行います。委員会は月に6月に一回以上の頻度で開催します

特に緊急やむを得ない理由から身体的拘束を実施している場合（実施を開始する場合を含む）には、身体的拘束の実施状況の確認や3つの要件を具体的に検討します

(2) 委員会の構成

管理職職員

(3) 委員の役割

管理職職員

統括管理・統括責任者・担当職員等による報告等の検証

担当職員

家族等との連絡調整、記録

プランの整備、意向の確認等、利用者、家族の意見調整

ケア方法の工夫、記録とその活用、ケアマネとの連携

医師との連携、医療機関との連携、本人家族への説明

栄養マネジメントからの取り組み

(4) 委員会の検討内容

① 前回の振り返り

② 3つの要件の再確認

③ 3つの要件の再確認要件の該当状況を個別具体的に検討し、併せて利用者の心身への弊害、拘束をしない場合のリスクを評価し拘束の解除に向けて検討します

- ④ 身体的拘束の開始を検討する場合は、3つの要件の該当状況、代替案について検討します
- ⑤ 身体的拘束が必要と判断した場合は家族等との意見調整の進め方を検討します
- ⑥ 意識啓発や予防策等必要な事項の確認、見直し
- ⑦ 今後の予定（研修・次回委員会）

(5) 記録及び周知

検討内容の記録様式を定め、これを適切な作成、説明、保管するほか、委員会の結果について職員等に周知徹底します

Ⅲ. 身体的拘束適正化のための研修

身体的拘束適正化のため職員等について、年1回以上の頻度で定期的な研修を実施します。研修の実施にあたっては、実施者、実施日、実施場所、研修名、内容（概要）を記載した記録を作成します。

Ⅳ. 身体的拘束等に関する記録（身体拘束に関するチェック表3）

緊急やむを得ない理由から身体的拘束を実施している場合には、身体的拘束の実施状況や利用者の日々の状況（時間や状況ごとの動作や様子等）を記録し、適正化委員会で拘束解除に向けた確認（3つの要件の具体的な再検討）を行います

Ⅴ. 利用者等による本指針の閲覧

本指針は本施設で使用するマニュアルとともに、すべての職員が閲覧可能とする他、利用者や家族も閲覧できるよう施設内の掲示やホームページでの公開を行います

<附則>

本指針は、令和5年3月23日から適用する。